第５回研究会

台湾林業の現状

—台湾南部の現地調査より—*

奈良産業大学地域公共学総合研究所所長・教授
渡辺　邦博
奈良産業大学ビジネス学部准教授
山本　英司

１．はじめに

本報告は、奈良産業大学地域公共学総合研究所の吉野林業振興に関する研究プロジェクトの成果の一環であるとともに、龍谷大学里山学研究センターとの共同による一連の林業調査の一端をなすものである。

２．台湾林業に関する先行文献

台湾林業に関する日本語文献は極めて少ない。中国語文献「臺灣私有林之特有問題」（1995年初出）を、今回の調査にあたっての基本文献と位置付けた。

３．國立屏東科技大學森林系へのインタビュー調査

2012年９月３日、奈良産業大学の提携校でもある國立屏東科技大學において、陳朝圳・副校長（副学長）、羅凱安・森林系主任（学部長）らに対し、上記文献を元に、疑問点及びその後の変化について尋ねる形でインタビュー調査を行った。主な調査結果は以下の通り。

- 台湾全島陸域面積3,591,500ha中、全島林地面積は2,102,400ha（58.53％）、非森林地面積は1,498,100ha（41.47％）。林地面積のうち、用途別では天然林72.7％、人工林20.1％、竹林7.2％。所有権別では国有林87.5％、公有林2.5％、私有林10.0％。
- 国有地を民間人が租借して造林を行う租地造林というものが、植民地支配からの解放後、政府の資金難を背景に行われたが、本来の意味での林業は成功していない。
- 1990年公布の「原住民保留地開発管理方法」によると、原住民保留地と呼ばれる特別な国有地において原住民が造林を行うと所有権移転登記が可能とあるが、法的には国有地のままであり、借金の担保などには使えるが、もっぱら心理的作用に留まる。
- 林業組合の地位は低く、林業経営も成り立っていない。
- 政府としては、木材自給率向上、レジャー農場、コミュニティーとのつながり、自然保護に

＊ 本稿は、2012年12月26日に龍谷大学深草学舎にて行われた龍谷大学里山学研究センター公開研究会における報告の要約である。なお、報告は、渡辺邦博・山本英司「2012年度台湾林業調査報告」『奈良産業大学地域公共学総合研究所年報』第３集、2012年12月、119-136頁、に基づいて行った。

力を入れていきたいと考えている。

4．三地門におけるエコツーリズムの現地調査

同月４日、陳美惠・森林系副教授（准教授）及び社區林業（コミュニティー林業）研究室に所属する学生の案内により、原住民部落で知られる三地門におけるエコツーリズムの現地調査を行った。達來部落（達瓦達旺）及び德文部落を回り、蜻蜓雅築（Dragonfly Beads Art Studio）においてトンボ玉作りを体験した。

また、2009年８月の台風の被災者の集合住宅にも立ち寄った。

5．二峰圳の現地調査

國立屏東科技大學近傍には、旧日本が台湾開発のために実施した土木工事の一つの二峰圳がある。同大学土木工程系（土木工学部）には、環境にやさしく費用のかからない水源の見地から二峰圳ダムを研究する丁澈士教授がおられる。

同月５日、丁教授に案内をお願いして、伏流水を利用した周辺環境にやさしいアイディアである地下ダムによって屏東平野を肥沃なサトウキビ畑に変えた技術やこの現代的アイディアの発案・実行者であった日本人・鳥居信平の非凡な努力についての説明を受けつつ、地下ダムをはじめ、技術者として鳥居の勤務した旧台湾製糖の施設跡、今なお地域住民に多大な恩恵を与える用水などを見学した。

6．おわりに

今回の台湾林業調査結果を、国内・海外での調査結果と総合して、研究の深化に繋ぐことを今後の目標としたい。